井上円了の台湾巡講に関する資料（一）

佐藤 厚
satou atsushi

井上円了は修身教会設立運動の一環として、明治四四年の一月から二月にかけて台湾で巡回講演を行った。これに関する基礎資料は、円了が書いた『南船北馬集』第六集所収の「台湾紀行」であるが、それは備忘録的な記録が中心であるため、講演の内容など、巡講のより具体的な内容を知るためには当時刊行された雑誌、新聞の記録によらなければならない。今回、筆者は日本と台湾で調査を行い、多くの資料を収集した。本稿はそれら資料の中、雑誌記事の一部と雑誌・新聞に掲載された画像資料を提示するものである。他の雑誌記事や新聞資料などは別稿に譲る。

本稿では円了の巡講の二つの講演、すなわち「精神修養法」（一月一四日、於台湾教育会）、「心理的妖怪談」（一月一五日、於国語学会）と、インタビュー記事「台北における教育と宗教」を紹介する。いずれも巡講での講演内容や円了の台湾に対する考え方を知るために必要な資料である。一つだけポイントを挙げると、「精神修養法」、「心理的妖怪談」の中では、当時リアルタイムで話題となっていた御船千鶴子、長尾郁子らの千里眼問題に触れていることが注目される。この二つの演目は円了の巡講では必ず行われるものであるが、同じ演目でも当時の時代状況を反映することが確認でき面白い。

〈凡例〉

一、読みやすくするために、原文に句点、読点を補った場合がある。

二、漢字の旧字体は新字体にした。

三、記事には振仮名が付いている場合もあるが、難読字を除き振仮名は付けない。

四、判読できない文字は■で示した。

五、記事の中には現代から見ると差別的な表現をしている部分が見受けられるが、歴史資料として当時の状況を知るためにそのまま掲載することにした。

一、雑誌、単行本記事

『南船北馬集』「台湾紀行」以外の台湾巡行に関する雑誌、単行本記事は次表の九本である。この中、5から8は『南船北馬集』にも収録されている記事であるので原文の収録は割愛した。また、9は二、資料画像〈画像6〉を参照。

〈表〉『南船北馬集』以外の雑誌・単行本記事

	題目	媒体名	刊行年月
1	精神修養法	『台湾教育会雑誌』一〇七	明治四四年二月
2	心理的妖怪談	『台湾時報』一八	明治四四年一月
3	精神修養法	『台湾教育会雑誌』一〇八	明治四四年三月
4	台北に於ける教育と宗教	『台湾』四	明治四四年二月
5	井上文学博士台湾巡遊詩集	『台湾』五	明治四四年三月
6	船入台湾（湖海絶調）	『文芸』五	明治四四年三月
7	台湾紀行	『東洋哲学』八―四	明治四四年四月
8	松本真輔伝（漢詩）	『実業之台湾』	明治四四年一一月
9	達磨絵、幽霊図（西郷孤月画、井上円了讃）	羽賀銀松『高砂文雅集』	大正六年一一月

1　**「精神修養法」（『台湾教育会雑誌』一〇七、明治四四年二月）**

精神修養法

文学博士　井上円了

此の篇は去月十四日の臨時会における講演の速記なり、博士の校閲を乞ふ暇なかりし故、或は多少の誤謬なきを保せず、諸君請ふ諒せよ。

今回の渡台に付き、かねて、総督府幷に各庁に御依頼致しました所が、幸に非常な御厚配を戴きまして、本島数箇所に於いて開会が出来るやうになりましたが、御当地の開会に付きましては、総督府幷に台北庁の御配意は申すに及ばず、御当地の御方々の御厚配に依つて、今日斯様な盛会を見ましたのは、私から厚く御礼申上げる次第であります。今回巡廻の趣旨に付きまして、私から直接に御話申すべき筈でございまするが、今日は教育会の御催で、此処に掲げてございまする精神修養と云ふことに就いて卑見を述べるやふにと云ふ御申込で御座いますから、巡廻の趣旨に就いては、同行致しました者に、前席に於いて一通り述べさせましたから、私は直ちに精神修養法と云ふ演題に就いて、御話申上げます。何卒、暫くの間御清聴を煩はしたいと思ひます。

精神修養と云ふことは、別に解釈する迄もなく、心の養ひをする、斯う云ふことであります。吾々は身体と心の二つから出来て居ることは決して疑ひない。其の身体を養つて行くのが吾々の務めであります。心を養つて行くのも是亦吾々の役目であります。其の身体を養ふにはどうして養ふかと言ひまするとと、衣食住の三つで養ふ。一日三度の食事をするのは其の職分である。一年三百六十五日、寝ても起きても着物を着なければならぬ。又住ふ家を設けなければならぬ。此の衣食住の三つに依つて身体を養つて行く。其の衣食住は誰が供給するか。農業、工業、商業が供給する。それから今一つ、心を養ふに付いてどうして養ふか。心を養ふには衣食住の養ひでは出来ない。心は形の無いものである。同時に之を養ふにも形の無いものを以てしなければならぬ。其の心の養ひには如何なるものが当嵌まるかと云ふと、之が即ち平たく言へば教である。此の教は誰が供給するか。身体の

養ひに農業、工業、商業が供給する如く、心を養ふ教は誰が供給するかと言へば、私は之に答へて教育と宗教の二つであると、斯う言ひたいと思ふ。教育と宗教とは素より同一ではない。同一でないからして、名前も違つて居る。同一でないと同時に、教育と宗教とは縁も由縁の無いものと言ふ程ではない。教と云ふ一段になつて参りますと、教育と宗教は同一と言つて宜しからうと思ふ。教育も教、宗教も教、両方貫通して居る。教育、宗教は吾々に教を供給する所のものである。此処で精神修養法を一言にして言へば、教育と宗教は吾々の心を養ふ方法手段であると言へば、それで尽きて居るやうでありますが、此の問題を説くには、教育と宗教との関係に立入つて御話申さなければならないと思ふ。今日は殊に教育会の主催でございますから、私の平生思つて居る所の教育と宗教との関係の一端を、併せて御話申して置かうと思ふ。

先づ、吾々が国民として、精神に修養を与へる心得としては、明治二十三年御下附の教育勅語、之が即ち国民の精神修養の心得を御示し下されたのであります。此の中には、吾々が、此世の中に、国民として一生を送るに付いて、総ての方面に向つて実践躬行するに付いての心得を、悉く含めて御示しなされてある。それから、軍人に就いては軍人勅諭、之が軍人の精神修養、其の軍人に特別に賜はつたものを見ると教育勅語に皆含まれて居る。であるから、吾々が国民として精神修養する心得は、是等の勅諭勅語で出来て居ると言つて宜しい。所が、更に進んで、之を倫理学、哲学と云ふ方面から申しまするとと、之を学術上から見ると、夫れ以上に考究しなければならぬことがある。勅語の上に御示し下された所の精神修養の箇條と云ふものは、仁のことも御説きなされ、義のことも御説きなされ、仁義礼智、智仁勇の三徳を、皆此の中に含めて御説きなされて居るけれども、是れは忠孝為本道徳と云ふことになる。是れは私が申す迄もなく、初めにそれを御説きなされて、それから終に至つて忠孝の二つを間接直接に御示しなされた。此の忠孝為本と云ふものは、道徳が社会の現象の上に発現したので、其の

忠孝為本の忠になると、所謂吾々心の誠、軍人勅諭にも誠を説いて御示しなされて居る。心の誠と云ふ所まで御示しなされてある。それで、是れは倫理学哲学の上の事として申さなければなりませぬが、此処に道徳と云ふものの分類を掲げませう。此の道徳を社会の組織或は社会の現象の上に発現したことに就いて説く説き方と、それから、吾々が心の、精神内部に就いて説く説き方の二通りあると考へて可からうと思ふ。其の社会の組織の上に現はれた道徳を説くのを、仮に社会的方面とでも言ひませう。

それから、精神内部に於いて説く方を之を精神的方面とでも言ひませう。それは私が仮りにさう云ふ名を与へたので、斯う二つに分けて見ますと、教育勅語に御示しなされたのは、社会的方面に於いて御示しなされた。社会と云ふ中に国家がある。国家社会組織上に当嵌めて忠孝為本の道徳を御示しなされた。之を精神に当嵌て見ると忠孝になる。もう一つ忠がある。軍人勅諭の一の誠、誠と言へば精神方面になつて来る。其の社会的方面に於いて国家的道徳を説くには、之が亦国に因り所に因つて各相違がある。日本には日本固有の道徳、西洋には西洋固有の道徳、支那には支那固有の道徳、世界各国道徳の発現が変つて居ると言つて可からうと思ふ。若し、それを精神的方面から言へば、さう変る訳は無い。道徳の根本の道理と云ふものは国に依つて違ひ、時代に依つて変る筈は無い。人間は善い事をしなければならぬと云ふ道理は、古今東西を論ぜず一定不変のものである。併し、それが社会の組織の上に発現する上に於いて、自から相違が出て来る。之を譬へて見れば、同じ水でも容れ物に因つて違ふ。所謂水は方円の器に従ふ。円い物に入るれば円い。四角な物に入れば四角だ、而も其の水たるや同じものである。同じ水が容れ物が違ふと形が変つて来ると同様に、道徳其のものゝ本体は一つであつても、社会の容れ物が変ると自ら違つて来る。茲に於いてか、日本は日本固有の道徳、西洋には西洋固有の道徳、支那には支那固有の道徳がある。斯う云ふことになる。我が国に於いては、夫等社会的方面の道徳はどの点に於いて違ふ

か、勅語の中で仰せられた忠孝為本と云ふことが違ふ。皇室の御先祖から、今日吾々に御譲り下された所は忠孝の二つより外無い。其の忠孝を吾々が祖先以来拳拳服膺して実行した結果が現はれて、国体の精華を発揮する。是れは固より社会的方面、所が、今度西洋に比較しまするとと、西洋に於いては忠孝為本の道徳と云ふことが出来まいと思ふ。例へば一家の道徳と一国の道徳の二つに分けて見ますと我が国に於いては一家の道徳は親を以て本にする、斯く云ふ立て方。それが孝道本位で、兄弟夫婦より親が一番大切だ。西洋に参りますと、一家と云ふものは人に因つて出来たものである。其の人は夫婦に依つて出来る。西洋の一家の道徳は孝道為本と言はれない。彼方らではどうしても夫婦本位であらうと思ふ。親より兄弟より夫婦が一番尊い。我が国は親を以て基とする立て方、一方は我が国に於いて皇室を本にする忠君を本にすると云ふ訳だが、西洋に至つてはそれが言へまいと思ふ。彼方らでは、忠君と云ふことはあるけれども、忠と云ふことは言へない。又西洋の国体は、時々政体が変つて、或時には共和政治となり。或時は君主政治になり、又中には全く君主を立てない国がある。さう云ふ国柄では、君を以て本にする、皇室を以て本にすると云ふことは出来ない。其の代り彼方らでは君より国が尊とい。さう云ふ立て方であることは、私が格別申さずとも能く御承知のことであらうと思ひますから略して置きますが、唯茲に支那と日本の道徳の相違に付いて一言申して置かうと思ふ。

世間、動もすると、我が国の忠と孝は、支那伝来の道徳たる忠孝と混じ、皆支那から伝つたものであるとして居る。支那孔孟の教を初めとして、是迄忠孝の道徳を説いたもので、論語や孟子を開いて見ても、忠孝の二字を繰返し使つて居る。或は孔孟の教は忠信孝悌の教へである。故に忠孝は支那伝来の道徳である。日本固有の道徳でないと云ふ説があるかも知れない。之に付いて、私が先年『勅語衍義』と云ふものを書きまして支那道徳と日本の道徳が違ふ。日本の道徳は忠孝為本であるが、支那道徳は忠孝為本でない。其の訳は先づ支那道徳と言へば、

孔子、孟子の教、孔孟の教と言へば即ち『四書』、『論語』、『孟子』、『中庸』、『大学』、之を開いて見ると成程忠と云ふ字もあれば、孝と云ふ字もある。『論語』二十篇の中に忠と云ふ字が十六、孝と云ふ字が十六ある。『孟子』七篇の中に孝が十九、忠が十三、それから『大学』には忠は無い、孝が三箇所出て居る。『中庸』には忠孝共に三箇所づつ出て居る。其の忠孝の文字の上から見ると、孔孟の教も忠孝為本に違ひないと云ふ考が起りますれども、さうでない。忠と云ふ字は唯忠と云ふ文字で、日本で云ふ忠君の忠でない。我が国に於いて君に尽すことを指して忠と云ふ其の意ではない。『論語』を出して御覧になつても御分りになるが、先づ『論語』の初めに「曾子曰吾日三省」とある。其の中の三箇條の一つ「為人謀而不忠乎」。忠は誠、人の為に謀つて、相談を受けたならば、親切を尽して遣らなければならぬ。誠を尽して遣らなければならぬ。広く人に対して交る道、君に対して尽すと云ふ意味ではない。或は「主忠信無友不如己者」とか、「夫子之道忠恕而已矣」どれを見ても、我が国の忠君の忠ではない。忠は広く人に対する道、心の忠、或は友達に対し、或は世間一般の人に対して忠を尽す。何も、君に対して尽すと云ふ意味ではない。孝は『論語』『孟子』も親に対して尽す。是れは人に対して尽す道でない。『孟子』の中の忠は忠臣の忠でない。広く人に交ると云ふ忠で、『孟子』の中に、君が尊いか、民が尊いかと云ふ点に於いて、民を重しとなす。社稷之に次ぐ。君を軽しとする孟子の説なので、それは民が尊い、百姓が尊い、人民が尊い、君は軽い。それで、忠君抔云ふことがあらう苦がない。孟子は忠君説ではない、忠民説だ。民に忠義を尽せと云ふ意味だ。斯うすると孔孟の教は決して忠君を本とした教ではない。其の代り、孝道を本としたものであります。先づ、孔孟の教の本尊様は堯舜、其の堯舜の中でも舜が主に本尊、何せ堯舜を大聖人として崇め奉るか。堯舜が聖人たる所以は、詰り孝道の点を標準としてある。舜が一番聖人として、舜を褒めるのに達孝である。至孝である。大孝である。舜位大孝行はないと云ふ。聖人の模範だと斯う説いて居る。であるから、『論語』『孟子』

で見る所の忠孝の忠は、我が国で云ふ忠道でない。孝は我が国で教へる所の孝道を本にして居る。

所が茲に疑がある。我が国に於いて、御維新の際に勤王論が起つた原因は何れにあるか。畢竟、御維新の際に孔孟の学問が盛んになつた。其の孔孟の教から勤王論が起つた。儒教に因つて勤王論が勃興した。御維新の当時、勤王論の基く所はずつと前の『大日本史』山陽の『日本外史』此の『日本外史』と云ふものが『大日本史』其のものに基いたもので、『大日本史』は百巻もある。之を一般の人が目を通す訳に行かぬ。それから、山陽が『日本外史』を拵へた。其の原因は『大日本史』にある。其の『大日本史』が我が国の勤王論の動機となつた。此の『大日本史』がどうして出来たかと云ふと、其の当時の漢学者を集めて光圀卿が編纂せられた。だからして、『大日本史』に勤王論を説いてありますけれども、全く儒教から割出してある。一寸吾々考へて見ると思ひ付きませぬけれども、『大日本史』を読んで見ると、孔孟の教は勤王主義から流れ出したのでない。『大日本史』は大義名分を明らかにして、所謂君臣の別、君は何処迄も尊い、民は何処迄も君を尊む、君臣の別を混ずると云ふと、将来どんな事が起らぬとも限らぬ、そこで君臣の間の大義を明にすると云ふので、『大日本史』が出来た。『大日本史』の起つた訳は、其の序文を読んで見ると直ぐに分る。と云ふのは、光圀卿が、若い時に、『史記』の伯夷叔齊の列伝を読んで大いに感ぜられた。それから思ひ付いて、日本に於いても歴史を明らかにせぬと、随分、乱臣賊子が起らぬとも限らぬ。何とか今の中に君臣の別を明らかにして、大義名分を明らかにせんと、それから『大日本史』を編纂せられた。序文の言葉に依ると、光圀卿が十七か十八か能く覚えて居りませぬが、其の時に、伯夷叔齊の列伝を読んで、是れは大変だ。日本も、将来、今は無いけれども、追つてどう云ふことが起らぬとも限らぬから、今の中に歴史を明らかにして乱臣賊子の起らぬやうに、大日本史の編纂に従事した。伯夷叔齊は何であるか、是れは支那の立派な勤王論者、当時周の文王武王、之が自分の君である。紂王を殺さうと云ふので出掛け

た。其の時に伯夷叔齊が馬を叩いて諫めた。御待ちなさい、君は何処迄も君、臣は何処迄も臣、臣たるものが君に刀を加へ、君を弑すると云ふことはあるべき道理が無い。成程、其の当時の天子の紂王は大悪無道であるかも知れぬ。臣として君を弑する、大逆無道だ。一の大悪無道を除く為に、他の大逆無道に易へるのは、所謂暴を以て暴に易へるので、臣を以て君を弑す、仁と云ふべけんや。暴を似て暴に易ふ。其の非を知らずと云ふことが伯夷叔齊の伝に書いてある。そこで、君を弑することは御止めなさいと言つても武王が用ひないから、そこで伯夷叔齊は残念なと云ふ所から周の粟を喰はぬ。もう、此の世の中に他の人と共々に居ることを潔しとせぬと云ふので、首陽山に立籠つて果てた。此の伯夷叔齊の伝記を読んで、光圀卿が深く感ぜられた。之が支那の勤王論、伯夷叔齊は勤王論者である。それから、文王、武王、周公、是れは支那の革命派、君だつても時に依れば殺して差支ない。伯夷叔齊は何処迄も君は君と云ふ勤王論者、此の時に勤王派と革命派と分れた。革命派の代表者が文王、武王、周公、勤王派の代表者が伯夷叔齊、勤王派が倒れ、其の反対に革命派が成功した。それが当時の状態である。

そこで、今度は、孔子に至つて伯夷叔齊の勒王論を執らず、文王、武王、周公の革命派を執つた。孔子も矢張革命派だ。文王、武王、周公の教を孔子は遂行せられた。孔子の精神は決して自分は新しく教を説くのではない。是れは文王、武王、周公以来聖人の教へである。孔子は革命派の教を執つた。孟子は無論のこと、であるから孔孟と云ふものは、詰り社会的方面の道徳の上から云ふと、革命主義の教になつて来た。伯夷叔齊の説は到頭支那で破れた。それが日本に来て再興した。余程面白い。支那で其の説が行れずして、日本に来て光圀卿の勤王論の動機となつた。それが現はれて御維新の大事業も成功を見ることが出来た。是れは面白い。支那で伯夷叔齊の説が破れて、日本に於いて勃興して来た。此の点から考へても、孔孟の教は孝道を本にして居る。如何せん忠道為

本の教でない。所が、日本は昔から忠道為本、大体に於いて忠孝為本であるが、中に何れに重きを置くかと云ふと、矢張り我が国に於いては忠道に重きを置かなければならぬ。

それで、私は教育勅語に就いて、是れは私は自分の卑見が誤つて居るか知りませぬけれでも。マア誰でも教育勅語を忠道為本と言ひまする。詮じ詰めて見ると忠道為本。初めに「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ」とあります。是れは成程忠孝の二つを挙げて御示しなされた。けれども、其の後に、「以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と云ふ御言葉に対して見ると、是れは「以テ」があるので、確かに忠道だ。一番初めに「父母ニ孝ニ」と仰せられて、一番終に「以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と云ふのは忠道を出ない。「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ」と仰せられたのは、社会の多くの人の国家に対する心得となりますから、約めて見ると、忠孝の二つしかない。「爾臣民」以下数箇條を引括めて、「父母ニ孝ニ」からして十何箇條とある。それを引括めて「以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」。畢竟、吾々が内に居つて親に孝行を尽すのも皇運を扶翼する。忠道を立てることになる。兄弟が仲好くするのも君の為め、夫婦の和合も君の為め、日本国民として祖先の遺訓と云ふものが総べて一家の道徳、或は世間朋友社会に対する道徳。是れは、天壌無窮の皇運を扶翼する忠道の為めである。此処へ来ると、忠の一字に決して仕舞ふ。所が、支那の道徳は忠孝を説いても、畢竟孝道本位、日本は忠道本位、此の事は私の間違つた考かも知れませんけれども、勅語を度々拝見して、此の点に深く感じました。それから勅語衍義などいふ、世間の勅語の解釈が違つて居る。私は、勅語はどうしても忠道為本であると云ふことを『勅語衍義』に掲げました。それは菅公の遺誡を読んで思ひ付いた。菅公の遺誡の中に、是れは御承知の方もございませうが、「凡神国一世無窮の玄妙は敢て窺ひ知るべからず、漢土三代周孔の聖経を学ぶと雖も革命の国風深く思慮を加ふべき也」と斯う云ふことがある。凡そ神国一世無窮の玄妙なる窺ひ知るべからず、実に日本の国体と云ふものは

神妙不可思議だ。是れは他に二つとない、一種無類、仮令、唐虞三代周孔の聖経を学ぶと雖も、仮令、禹湯文武の道を学んで見ても、我が国の一種玄妙不可思議なる国柄は分らぬ。支那の本を読むも可い、孔孟の教を知るも可いけれども、革命の国風深く思慮を加ふべきなり。『論語』『孟子』支那の書物を読んでも可いけれども、あの中には、革命の事を説いて居る。あれは革命の教である。其の革命の点に於いては深く注意を加へなければならぬ。其の教を迂濶りして読むと、支那の孔孟の教の中に含んだ革命主義を、日本に当嵌めるやうになる。それでは大変だ。それを見て、我が国の道徳も支那の道徳も忠孝だと云ふけれども、忠孝と云ふ文字が支那の道徳から来たやうで、さうでない。支那の道徳は孝道本位、君に対しては革命主義、我が邦はさうでないと云ふことを、菅公の遺誡に就いて思ひ付いた。それから、勅語を繰返し拝見して見ると、初めに「克ク忠ニ克ク孝ニ」と忠孝を挙げて御説きなされた。是れは何であるか、親に対して孝行と云ふ意味では無い。日本国民全体が一致共同して、上に皇室を戴く。詰り、忠孝の心得を以て上に皇室を戴くと云ふ意味だ。だから、それを約めて見ると忠道一つになる。そこで、我が国の社会的方面に於ける道徳と云ふものは、大体忠孝であるが、それを詮じ詰めると忠道為本、支那は孝道為本。茲に於いて支那の道徳と我が国の道徳とは違ふ。孝道為本で国民の心を成した東洋は段々衰へて参り、唯今では東洋の多くの国は亡び、或は将に亡びんとする有様。其の中に立つて、東洋のはてに居りながら、日本独り独立を全うし、東洋第一の文明国、世界の一等国になつた原因を探つて見ると、忠道本位の道徳があつた結果である。国と云ふものは唯大きいから好いじやない。兎角、人は国が大きいに依つて俺は偉いものだと云ふ。若し大きいのが宜いとしたならば、人間は万物の霊長と云ふけれども、人間より大きなものがある。人間より大きな牛や馬や或は象や鯨、大きな方から言へば象や鯨が万物の霊長であるかも知れない。人間はそれより小さいが万物の霊長となつて居る。大きいから、人口が多いから宜いじやない。詰り、国としては

其の国の中心が確立して、ちやんと確かり成立つて、さうして其の中心が十分に結合されて、団結の鞏固なるものでなければ役に立たぬ。総べて、何事でも、其の団体が鞏固にならなければ、何も用を為すものでない。それで、我が国に於いては国の団結を何に依つて今日迄鞏固にして来たか、忠君主義、皇室が中心となつて、此の国家の団体を鞏固にして来た。西洋では皇室本位でない。忠君を中心とすることは出来ない。彼方らは国本位で、君より国が尊い。国を治めるに君を立てることが必要である場合に君を置く観念、彼方らは総べて国本位。所が、日本では固より忠君愛国と云ひ、或は尊皇愛国とも云ふ。国と云ふことも説くけれども、其の国の中心が皇室である。そこで、尊皇愛国も帰する所一つになつて来た。忠君といふのが本になる。

そこで国を以て本位とする。皇室を以て本位とする。何方が宜いかと云ふと、団体を鞏固にさせる点に於いては、皇室本位が一番宜い。何ぜかと云ふと、国と云ふものは極く漠としたもので、国と云ふものは抽象的のものである。それから、皇室とか、君とか云ふと具体的の格段なものである。総べて、抽象的のものは考を纏めるに就いてむつかしい。多数の人の考を一定に纏めることがむつかしい。具体的になると、其の方に引く力が強い。西洋では漠然とした国を本にして居る。国家と云ふも形の無いもので、そこで多数の人心を鞏固にさせる。団体を鞏固にさせるには、皇室中心が一番力がある。それから支那と日本を較べると、支那は孝道本位。孝道本位と云ふものは一家本位なんだ。一家を纏める上には孝道本位が好い。けれども、孝道本位では一国の団結には役に立たぬ。国の団結するには、国の中心を立てなければならぬ。孝道本位は銘々一家を目的とする。支那が今日弱い訳は、国としては弱いが、一人としては日本人より以上かも知れぬ。それが何ぜ弱いかと云ふと、国の中心が薄弱だ。支那人は尊皇忠君と云ふ考は極く微弱だ。其の代り親に対する孝道と云ふ考は強い。孝道は一家本位である。あの大きな国に沢山家がある。其の一家の団結と云ふことが国の団結に効力がない。日本の強いのは孝道

本位でない、忠道本位。国家の中心は皇室を中心として、確然其処に万歳の下に括り付られけて居る、其の力で日本の方が鞏固である。それが東洋に多くの国のある中、学術の程度が西洋に較べて大変後れて居るに拘らず、僅か四十年程で是れ丈けに進んで来たのは、畢竟忠道本位、皇室と云ふ中心があつたからである。でありますからして、此の皇室中心、社会的方面の道徳は、之が一国の命脈である。それは今度の戊申詔書の上に照しても能く分る。先づ人間は何の為に生きて居るか、社会的生活をして居るか、吾々は人文の為に品性を吐き尽さなければならぬ義務がある。今日の世に生れて、文明の恩沢を受けた於ら好いではない。生れて、飲んだり食つたりして死んで仕舞へば、人間の目的が達せられたのではない。それでは、人間に生れないで犬や馬に生れた方が宜かつた。人間に生れて社会の生産物たる人文、文明なる国に生れて文明の恩沢を受けたならば、自分の力に応じて、相当に文明の為に尽さなければならぬ。そこで、戊申詔書に人文と云ふことを先に書かれて、其の人文を世界の文明の恩沢を受けて、其の文明を日に月に進めて行かうと云ふには、国民の発展がなければ出来ない。国が盛んでなければ出来ない。其の国を盛んにするにはどうしたら可いか。教育勅語に当嵌めて忠道為本、皇室中心、忠君本位の教があつてこそ、国家の団体が鞏固に、何処々々迄も発展して来る。でありますから、戊申詔書の上に「我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル国史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ」それがあるからして、始めて国運の発展が出来る。社会的方面に於いては、何処迄も日本の道徳は忠孝為本である。而も忠道に依つて国を鞏固にし、世界文明の恩沢を受けて行くものである。（未完）

2　「精神修養法（続）」（『台湾教育会雑誌』一〇八、明治四四年三月）

精神修養法（続）

文学博士井上円了

それから、もう一つ精神的方面。唯今は社会国家の組織上に当嵌めた道徳、教育勅語の社会的方面の道徳、精神的方面として説いてある軍人勅諭、一の誠と云ふことは立派な事で、一の誠が精神的方面。精神的方面所謂良心、人間と生れて誰でも良心はある。中には良心の無い人もあるやうであるが、不具者でない限りは、人間と生れては何処迄も天賦の良心がある。其の天賦の良心は道徳を土台となす。詰り、良心と云ふのは、吾々が善を善とし、悪を悪とす。善悪を弁別し、而も悪を去りて善に就かうと云ふ望、即ち良心の働き、それを、もう一つ言ひ換へて見れば心の誠、吾々の心には生れながら一つの誠を備へて居る。其の良心の誠が社会の上に現はれると云ふと、其の社会の組織に応じて、忠道ともなり、孝道ともなり、愛国ともなる。是れは誠の発現、其の本はと言へば精神的方面になる。此の精神的方面に就いて、良心の何なるを論ずるのは、所謂倫理学の受持で、倫理学は社会的精神的両方を引つ括るめて研究して居る。今日は、時間が無いから、精神的良心は何であるか、良心の働きは何うであるか、別に詳しう申しませぬ。

もう一つ、茲に、宗教と教育の関係を説きまする上に就いて、御話して置かなければならぬことは、此の外に形而上的方面と云ふものがある。形而上と云ふ社会的、精神的、夫れ以上の方面がある。此の社会的、精神的と云ふものは、言ひ換へて見ると、人間本位の道徳と云ふことになる。此の人間以上の方面は何であるか。宇宙本位、或は絶対本位、之が即ち形而上的方面。人間本位の道徳を研究するのが今日の所謂倫理学、それから、形而上は宇宙本位、絶対本位の道理を研究する方面が哲学。此の哲学にも狭い意味で云ふ哲学、広い意味の哲学と二つある。広い意味で云ふ方には倫理学と云ふものが、哲学の中に這入る。狭い意味で云ふ時になると倫理学は這入らない。宇宙本位、絶対本位の杉而上の方面を説くのを哲学と称する。道徳を説く上に、一方は社会的、精神

的方面、或は人間本位を説く外に、形而上方面に於いて説くものがなければならぬ。それは何ぜかと云ふと、吾々人間一生を送る間に、時に依つて、人間を以て満足することが出来ないことがある。人間社会に於いて、どうしても吾々が安心が出来ないことがある。例へば吾々が死ぬと云ふ場合に於いて、死んだ後にどうなる、行先は何処か、後に残つた子や孫はどうなるか分らない。さう云ふ境遇に、人間社会を以て安心が出来なくなる。其の場合に、人間本位の道徳では効能が無い。仮令人間が無くなるとしても、人間以上に■るものがある。哲学はどうなるかと云ふと、決して無くならぬものがある。人間は無くなつても、宇宙が無くなる訳ではない。そこで、宇宙の上に立つものがあると、始めて吾々が安心する道を求めることが出来る。それで、道徳を説く上に、人間本位も或る度迄は好いけれども、夫れ以上になると役に立たぬ。例へば、道徳上に於て、人間は善い事をすれは善い報がある。悪い事をすれば必らず悪い報がある。天道は善に幸ひし悪に禍ひすと云ふけれども、吾々それでは満足が出来ぬ。善人に不幸があつて、悪人中に幸福の者が多いことがある。「積善之家必有余慶、積不善之家必有余殃」。其の当時は善人に不幸があつても、子々孫々報いを受けて、長い間には仕合せを受けることが出来る。或は又一代悪人に仕合せがあつても、子々孫々の長い間を眺めて見ると、不幸災難に遭ふに違ひない。けれども、積善の家に余慶あり、積不善の家に余殃ありと云ふ丈けでは、決して吾々に満足を与へることが出来ない。何ぜかと云ふと、善人の家に不幸が多くて、悪人の家が子々孫々繁栄するものがある。さうすると、積善の家に余慶あり積不善の家に余殃ありと云ふことで満足することが出来ない。或は又、人間は一代善い事をすると、其の代は世の中へ知れない。或は誤つて悪人と見らるゝことがあるけれども、後世子孫に至つて、あの人は善人であると、長く世の中に伝はる、斯う云ふ説がある。社会は長く生きて居らぬ。人間は五十年か百年。此の社会が長く生きて居る間には、社会が人を賞罰して呉れる。斯ういふ説があるけれども、それは決して当てにならぬ。吾々

一代に於いて為した事が相当に顕はれて、後々迄も伝はるかも知れぬけれども、今日に於いては分らない。決して人の心の内部まで見抜くものは無い。幾ら、千里眼、透視眼でも心を見抜く者は無い。それから千里眼、透視眼に、此の地に石炭山、鉱山は無いか、或は台湾に鉱山、金山は無いか見て下さいと言つてもむつかしい。誰も心の中を見抜くことは出来ない。楠正成の本当の心の中を見て下さいと言つても、幾ら千里眼でも其の当時の心の中を見抜くことは出来ない。だから、社会と云ふ奴は何も役に立たぬ。吾々、時々、社会から誤まられることがある。社会が悪人と見ても善人であるかも知れない。社会が善人と認めたからと言つても、本当の善人でないかも知れない。何か詰らない少し計りの記録が跡に残つて、それに依つて悪人が善人になつて仕舞ふ。或は悪い記録が出て来ると、忽ち悪人になつて仕舞ふ。併し、其の記録だつても当てにならぬ話だ。社会が後になつて人を賞罰すると云ふことは、決して吾々が満足出来る筈のものでない。

夫れのみならず、社会と云ふものゝ寿命が、吾々が考へて見ると、社会は何億年何億万年続くやうに思ふが、天文物理学の力に依つて、天地に寿命があり、世界に寿命があることを認められる。此の地球の如きは、何万年何十万年か分らぬけれども、一度は壊はれて仕舞ふ。人間社会所ではない、悉皆生き物が無くなつて仕舞ふと云ふ。斯うすると、人間本位で社会の賞罰と云ふのみでは、どうしても、吾々に十分な安心を与へることが出来ない。若し、人間を以て満足することの出来ないやうな境遇に達した時には、其の者に満足を与へるのは、必らず形而上の方面から説く道が出て来なければならぬ。それは何であるか、人間と云ふものは宇宙間の一小動物である。地球上の小さい動物で、蟻や蜂に較べると、人間は大分大きいやうに思ふけれでも、世界の高大無辺のものに較べますれば、地球と云ふものは何とも言はれぬ小さいもので、其の小さい地球の上に居る吾々、五尺六尺の身体が生きて居つた所が、何とも彼とも言はれぬ程小さい。世界から言へば、数にもならぬやうな人間、併し、

其の人間が此の世界を研究して居つて、今日の文明を何も彼も産み出して来た。其の点から人間位偉いものは無い。宇宙から見ると、どうしても吾々人間は小さいと考へるより外ない。所が、人間が始終生きたり死んで無くなつたりするが、吾々のみならず社会が無くなる。社会が無くなつても、大宇宙は決して無くなるものでない。形の上の変化が、死んだり生きたり壊はれたり活きたりすることは、それは絶えずある。それは、宇宙間に於ける森羅万象が、或る時には生じ、或る時には滅し、或は出来或は壊れる。千変万化千態万状、ずつと変化して行く。けれども、変化のある中に絶対に無くならぬものがあるに違ひない。物質に就いて研究して見ても物質不滅、勢力に就いて研究して見ても勢力不滅である。世界が無くなつても、屹度無くならぬものがあることは、実験上確かである。そこで、吾々人間を以て満足することが出来ないのは、此の宇宙の変態に向つて訴へる道がある。人間が滅し社会が滅しても宇宙は滅しない。此の道が無かつたならば、満足を与へることが出来ない。それが哲学なので、形而上の方面は道徳の根源は研究して居らぬ。そこで、其の形而上の宇宙の本体から極はめたものを、もう一つ、社会的方面人間的方面に向つて当嵌める道がなければならぬ。それを、私は宗教だと云ふ。併し、茲に、宗教にも幾道りもある。

まあ、世界中の人間として東西に別けると、耶蘇教と仏教であらうと思ふ。色々宗教はあるけれども、其の中で東西相対立して宗教として大壮懸に数へ上げると、仏教と耶蘇教の二つである。此の耶蘇教は単純の宗教であるが、仏教は複雑な宗教である。複雑な宗教とは何であるか。仏教は哲学を根拠として組立つて居るからである。耶蘇は哲学を以て根拠としたものでない。私は、今度、前席に御話致しましたでありませうが、東京近辺に哲学の紀念堂、哲学堂を拵へて四聖人を祀りました。東洋では支那の孔子、印度の釈迦、西洋では、古代ではソクラテス、近世ではカント、此の四聖人を本尊として祀る。さうすると、何ぜ耶蘇を入れぬか、耶蘇は大聖人である、

世界の聖人の中に何ぜ入れぬ、斯う云ふ質問である。其の堂は哲学堂なんだ、宗教堂なれば耶蘇も入れなればならぬが、哲学堂だ。其の哲学堂に耶蘇を入れたら、耶蘇は哲学者になつて仕舞ふ。昔から今日迄耶蘇を哲学者として仰いだ者は一人もありませぬ。宗教家としては神様である。であるから通常の哲学者なら、あらゆる哲学者を並べても、其の中に耶蘇を哲学者として扱つた者は無い。所が釈迦になると哲学者、釈迦の説く所は半分哲学半分宗教、哲学の方面から見ると哲学者、宗教の方面から見ると宗教家、東洋の哲学には支那哲学、印度哲学の二つがある。支那哲学には孔子を入れなければならぬ。印度哲学には釈迦を入れなければならぬ。西洋哲学では、古代の代表ではソクラテス、近世の代表ではカント、それで四人を聖人として祀るのである。耶蘇は哲学の代表者ではない。耶蘇は古代哲学に於いても、希臘以後、近世哲学には耶蘇は近世以前の人、其の中の何処にも入れぬ程の哲学者でない、宗教家である。哲学堂に耶蘇が加はらぬ訳である。耶蘇教の根拠は哲学ではない。今日では神学哲学、耶蘇教哲学と云ふことを言ひますけれども、後に宗教上から布衍したものである。之に反して、初めから仏教は哲学から起りつつある。

印度の宗教は、其の当時、印度哲学の流行の時代、先づ哲学の学派としては、大体六つの大学派がある。それを小別けにすると九十六通りの学派がある。それが盛んに講論を戦はした。命を懸けて議論した。さう云ふ時代で、釈迦の宗教は何処に行つても余り説けない。どうしても九十六種の学派と戦はなければならぬ。そこで、釈迦は宗教を説くのが本位であるけれども、先づ宗教を説く前に哲学を説いて、九十六種の学派に勝利を得た為に、後に宗教を唱へた。それで、初めは哲学を説いたのである。そこで、仏教の成立ちを見ると、形而上宇宙本位哲学を人間本位に当嵌めて来た。仏教上で言へば、哲学上の形而上の本位を之を出世間と云ふ。出世間の方を世間に当嵌めて、吾々人間は之に依つて満足し、精神上の修養ともなり、道徳上の安心も得られる。今日は時間があ

りませぬから、仏教に渉つて詳しい御話はしませぬけれども、仏教が形而上の道理を以て、人間本位、社会の方面に向つて修身道徳の道を開ひたと云ふ所を、一言申して置かうと思ふ。詳しい事は勿論御話することは出来ない。仏教は宗教だが、哲学の上から説いて、哲学上に於いて、或は人生観、宇宙観、是れは人間は何であるか、此の世界は何であるかと云ふ問題を先に提供して、吾々人間は何処から出て来たか分らぬけれども、母の胎内から出て五十年百年の一生を送つて居る。世界は何であるか、茲に人生観から世界は何であるか、此の世界を解決しやうと云ふのが仏教の動機。さうして、哲学方面に向つては、此の世界は万法の世界、世界の事々物々生ずる時に万法と云ふ。万法と云ふのは、あらゆる物を皆引つ括るめて云ふ。此の中には、形の有るものばかりでない。形の無いものもある。其の方法は何であるか、段々研究して行くと、初めは分析上、果して吾々が目で見る如く、数限りなき森羅万象が此通り実在して居る。それを分析し分祈して見ると、其の根本に或る一定の原素がある。一定の原子原素があつて、それが集つて組立てられる。それが離れると無くなって仕舞ふ。

物が出来るのは集る、無くなるのは壊はれる。けれども、其の根本になつて見ると、決して無くなるものでない。実際、万法の中心に、一定不変、無くてならぬものがあるに違ひない。之が真如だと云ふことが出来る。真如は世界の本体である。真如は宇宙の本体である。即ち、絶対である。万法を究めて真如に達し、真如が万法の本体であると言へる。それから、真如と万法の関係を説いて申上げたいのでありますが、是れは今日は時間がありませぬから、詳しい説明は出来ませぬ。此の万法と真如の二つの間に、もう一つ双方連絡するものがなければならぬ。それが、因縁とも因果とも云ふ、万法から進んで、絶対の真如に達する。真如の階段は因果、それに依つて真如の本体たる万法を現はす。真如が開発して万法の世界を現はす。因果の働きに依って万法の世界が分つて来る。例へば此の扇子である。此処に万法、山もあり河もあり水もあれば木もある。人間動物日月星晨、所謂

森羅万象が万法、此の根本が所謂真如で、此の真如の開発に依つて万法を現はす。扇子で言へば骨で、此の骨が万法を開く。現はすものは因果、其の因果が丸で働かなかつたならば万法は無い。詰り、骨も縮めて仕舞ふと一本の扇子だ。それを即ち真如と云ふ。其の真如が因果の規則に依つて、因果の働きに依つて万法の世界を現はして居る。即ち、真如から万法の現はるゝことを説いて、それを宗教に当嵌めて、吾々万法の境涯の人間が、どうして真如の境涯に達することが出来るかと云ふことを説いて居る。それには、固より因果で達しなければならぬ。真如の本体に達した場合を仏と云ふ。万法の境涯から真如、仏の境涯に至るには因果の階梯に依らなければならぬ。因果の階梯にどうして依るかと云ふと、道徳方面に移つて、善因の道理に基いて、善因に善因を重ねた結果、真如の本体に達する。そこで哲学上で研究した結果、人間に当嵌めて、今日、人間が道徳上に於いてどうして満足し得らるゝかと云ふことを示したものである。それから、人間が善因善果に依つて愈仏になる。

仏教には自力と他力の二つがある。万法の人間が真如、仏になるには、固より因果の階段に依らなければならぬが、其処に自力他力の二つがある。自力の方から云ふと、人が仏になるには、自分の力で善因を修めて、善因に善因を重ね、其の最上の結果、仏になるのは自分の力であるから自力、他力の方から云ふと、吾々は自分の力を頼むことが出来ないから、吾々は仏に頼む。仏の力で人間が仏になる。吾々が善因を修めるには及ばぬ。一々善因を積重ねるには及ばぬ。仏を頼みにする。さう云ふと、他力の教は因果の法に背いて居る。斯う云ふ論が出て来る。所がさうでない。人間が仏になるには因果で、自力は人の方に付けて見る。他力の方になると、因果を仏の方に付けて見る。因果が仏の方に備つて居る。吾々は因果の階段を一々踏むに及ばぬ。仏を信ずる。仏があらゆる善因を修めて呉れゝば其の仏を頼む。因果の法に背いて居ない。それで、自力他力の違ひは、人間に付けて説くのと、仏に付けて説くので違ふ。此の事は一口話では到底十分御分りになりますまいが、何しろ仏教は因

果を根拠として、万法から真如に達する。それであるから、因果は仏教の骨髄である。其の因果を道徳方面に当嵌める。そこで、吾々人間は、或る場合に於ては、人間を以て満足することが出来ない。自分は善い事をしたに拘らず不幸がある。甚しきは、自分が悪い事をせぬのに、人から悪人或は罪人であると誤つた判断を下される。さう云ふ時に、どうして満足するかと云ふと、其の場合には吾々因果の理を信ずる外ない。此の因果は世界の規則である。宇宙本体の規則である。そこで、人間と云ふ点になると、変化の多い、死んだり生きたりする境涯にある。

人間は一万年二万年の間には、此の因果、善因善果を見出すことが出来る。吾々善い事をしたならば、何時か一遍其の規則が吾々を満足させる時があるに違ひない。宇宙の因果の原則に向つて、大いなる道を開いた。それに依って吾々は満足する。善因を修めれば善果がなければならぬ。或は人間一生善因に相当しない事があつても、此の宇宙のあらん限り、必らず善因に対しては相当の善果がある。吾々は此の宇宙の本体に生れ、宇宙の原則に依つて安心しやうと云ふことを説いて居る。近来、教育と宗教の関係と云ふことが段々起つて参りましたが、社会的方面の道徳に就いては、是れは固より、教育勅語、それから精神的方面を説くに就いては倫理学、もう一つ人間を以て満足することの出来ない場合としては、形而上の方面から吾々の精神を堅めなければならぬ道がある。それは仏教上、哲学上より説き、人間の未来に当嵌めたことを掻い摘まんで御話を致したのであつて、是等の事は当地滞在中に、或はもう少し御話することがあるかも知れませぬ。今日は彼是時間が遅れましたから、宗教と教育の関係に就いては略して置きます。

先刻、支那道徳と我が国の道徳の相違を説きましたが、支那の教は孝悌忠信で、孝道に重きを置く一家本位、一家本位は国の団結を強くすることは出来ない。それより皇室本位、君主本位が国の団結を鞏固にする力がある。

国家を鞏固にし、世界人文の為に、人間が此の世の中に生れて、飲んだり食つたりして死んで仕舞ふのは人間の勤めでない。世界人文の為に尽す。其の人文を進め、国運を発展する方面と、教育勅語の方面より、支那の教と相対して御考になつたならば、御分りにならうと思ふ。然らばさう云ふ詰らないものを、哲学堂に何ぜ祀つたかと云ふ疑問が起るかも知れぬ。それは孔子の罪でない。孔子の時代にあつて説くならば、どうしたつてあれより外説き方は無い。決して孔子の罪でない。若し孔子さんが明治今日の日本に生れられたならば、孝道本位を説かれやしない。必らず、忠道本位を説かれたに違ひない。それは孔子の生れた当時を考へなければならない。吾々、今日孔子の道を学ぶ上に、今日、孔子が再び生れ来つたならばどうであるか、孔子の道は説かぬ。必らず社会の風潮に応じた教を説く。それが孔子の教を活かすのであつて、今日孔子が再び生れられたならば、必らず忠道本位を説かれたに相途ない。そを間違つて孔子が孝道本位である。孔子が一家本位である。今日、一家本位は間違つて居ると云ふのは孔子の罪でない。併し、之を応用することは、事に依ると誤りを生する。苟も国民となり臣民に列した以上は、五千万六千万の国民が、何処々々迄も皇室本位忠君本位で、国家的団体を鞏固にし、之に依つて日に月に人文を進め、世界文明を何処迄も発揮して進まなければならぬ。詰り、其の事を御話したい積りでありましたが、御話するに付ては、精神修養の外の方面を御話しなければなりませぬので、脇道に移つて長くなりました。吶弁で、長い間余計な御喋りをして、定めて御迷惑でございましたらう。それにも拘らず、静粛に私の如うな吶弁な御話を御聴取下さつたことを、終に臨んで一言御詫びを申して置きます。（拍手喝采）

3　「心理的妖怪談」（『台湾時報』一八、明治四四年一月）

心理的妖怪談

文学博士　井上円了君

本編は本月十五日国語学校内に於て当支部の開催せし講演会の筆記なり。印刷の日時逼りし為め博士の校閲を経るの遑なく、若し誤謬あれば責編者に在り。

今度渡台致しましたに就きまして、万事各位の御厚意を得ましたのは深く感謝の至りであります。今日は東洋協会支部の御催しになつた講演会に御招下されて、此席上に列することを得ましたのは私の仕合せと存じます。唯今片山学士から国家経営上に就て、最も有益なる御話が懇々ございました。私は今日少し夫れとは趣の変りました心理的妖怪談に就て、暫時御清聴を煩はす次第でありまするが、此演題は特に本会の御所望に依つて定めました次第で、私が先年来、数年掛つて研究致しました其の結果の一部分を此処に御話申さうと云ふことから、此演題に付て御引受けを致した次第であります。

之を話しまするには勢ひ妖怪其のものに就て大体の原理を申上げなければなりませぬが、私は昔から今日迄、公けに伝はつて居る種々雑多な妖怪を取集めて調べて見まするとと、日本程妖怪の種類の多い国は無いと云ふことを感じました次第で、我国の妖怪の種類は四百何十通りと思ひます。何れの国と雖も妖怪の無い国はない、如何に西洋が今日文明の程度が高いと言つても、矢張り各国皆多少の妖怪を持つて居る。けれども日本位種類の多い国は少なからうと思ふ。東洋の国は何れも妖怪が多いが、就中日本には妖怪の種類が多い。其の種類を研究上から先づ大体二つに別ける。一は物理的妖怪、今一つは心理的妖怪。此物理的妖怪と云ふのは物から生ずる妖怪、心理的妖怪は心から発する妖怪である。此二つに大体を別ける、それを更に小別けにすると之に復た幾通りと云ふ種類が分れる。此物理的妖怪、心理的妖怪は本当の妖怪ではない。でありますからして私は之を仮怪と名付け

る。仮りの妖怪といふ名義を与へ、仮怪に対して亦真怪と言つて、真の妖怪もありますが、今日は真の妖怪に跨つて御話申さうと思ふですが、物理的妖怪は時間がございませぬから略して置きます。殊に演題も心理的妖怪に限られて居りますから、重もに心理的妖怪、吾々の心から起る、精神作用から起る所の妖怪に就て申します。尚心理的妖怪を論じ切ると、真怪と云ふ真の妖怪の問題に達する。それ丈けの順序で一と通り御話を申して置かうと思ふ。此妖怪と迷信とは殆んど同一と言つて宜しい位親密な関係がある。マァ迷信の種類を申しまするとと、或は方位方角、どの方位が善い、どの方位が悪るいと云ふのが矢張り迷信である。或は日は何の日が善い、何の日が悪るいと云ふのも迷信である。先づ方位の上に於ては、日本全国到る所で信じて居る人が多いが、鬼門と金神、此鬼門金神を犯すと必らず其の家に災難があり病人がある。家を建てるに鬼門金神を避けると云ふことを一般に申して居ります。鬼門金神は詰り迷信である。鬼門とはどうして起つたかと云ふと、世間で鬼門金神を恐れる人は、何も鬼門の起りがどうであるか、金神の起りがどうであるか、誰も取調べて居ない。鬼は恐ろしいものである、金神は怖はいものであると云ふ丈けは知つて居る。此鬼門はどう云ふことから起つたかと云ふに、是れは支那伝来の説でありまして、支那では或は神異経といふ書物、東方朔の書いた神異経が元だと云ふ。或は山海経と云ふ書物がある。それが元だと言ひまするが、是れは大同小異であつて、帰する所は鬼門は怖い所で、東北に向つて鬼が住つて居る島と云ふ伝説がある。何れ支那では漢時代さう云ふ伝説が伝はつて居つたものがあります。そこで東北を指して鬼門と云ふ、其の鬼門を犯すと、其処に居る鬼が祟りを為すと云ふ所から、家を迷てるに鬼門を避けると云ふ信仰を喚び起したけれども、今日になつて見ると現状はどうであるか、鬼の住つて居る島は無い。鬼の住居して居る国の無いことは明かであります。それから金神であるが、安部晴明（ママ）の書かれた簠簋内伝の中に出て居る。其の言葉に依ると、日本より海上南三万里を離れた所に夜叉国がある。其の国の王様、国王をコ

タンと名付く。其のコタン国王が如何にも殺伐にして金性なるが、故に名付けて金神と云ふ。之が我国に於て金神と云ふことを伝へた元のやうであります。所で、日本から海上三万里を離れた南と言ひまするとと、何処になるか。南に三万里と言へば此地球をずつと一廻り廻つた所が一万三千里乃至一万八千里。一万千里に充たぬのに、地球の南三万里と言つたら、ずつと地球の外に出て仕舞ふ。其処に鬼が住んで居る国は無い、あつた所が差支ない。昔の人が之を恐れたのも是れは怪むに足らぬ。それは当然である。今日是れ丈けの地球も開け、天文の智識が開けて居るに拘らす、南三万里を離れた所に鬼が住んで居ると云ふことを信ずるのは、如何にも奇怪千万と言はなければならぬ。併し世間で鬼門金神を恐れるのは、決して其の起りは何であるか、種類がどうであるかといふことを知つて恐れるのでない。誰某は家を鬼門に建てたから斯ういふ災難があつた、誰某も金神に触れた為に斯う云ふ災難があつた、それを聞いて、其の例を聞いて恐れる。恐れると同時に、必らず触るればそれに相当する病人なり災難があると云ふことは是れは別問題だ。若し一家挙つて我家が鬼門に触れて居かるから必らす病人が起るであらうと思ふと、病気が起り病人があると云ふことは、鬼門金神の崇に依つてある訳ではない。此方らが若しそれを思ひ、それを信じ、病人になるであらうと迎へて居れば必らす病気になる。それを今から見ると、是れは詰り吾々の心から起るのである。心から生ずると言はなければならぬ。或は方位方角、日の善し悪し、帰する所は心理的妖怪と云ふことになる。

それから心理的妖怪として一番重もなるものは幽霊、それから狐憑、或は天狗憑と云ふやうな、何れも心理的妖怪の重もなるもので、日本の妖怪の種類は四百何十もある。又此憑き物も幾通りもあるが、其の一番多いのは狐憑であります。狐憑ばかりも幾通りあるか分らない。色々憑き物があるが先づ狐憑は所に依ると狐とは言はない。例へば群馬埼玉県辺りではオサキが憑くと云ふ。それから信州の或る部分では白狐が憑くと云ふ。三州では

クダ狐、或はムジナが憑くと云ふ。それから出雲地方に参りますとニンコが憑くと云ふ、隠岐の一部分、島前島後と分れて居るが、ニンコが憑くと云ふ。出雲と同じだ。飛騨の国に参りまするとと牛蒡種が憑くと言ひます。ゴンボーと言ひまするのは、矢張り出雲のニンコと同じことで、其の外、佐渡の如きは貉が憑くと云ふ。それから四国へ参りますと、讃岐では狸が憑くと言ひ、四国全体では活神が憑くと云ふ。それから山陰道の因幡に参りまするとトービョーが憑くといふ。広島辺でもトービョーと云ふ。長崎県の五島若くは対州の方に参りますと河童が憑くと云ふ。彼方らではガッパー或はバートラと言ひます。それから又伊豆の大島に参りすと鼬が憑くと言ひます。隠岐の島前島後とある島後に参りますと猫が憑くと言ひます。それから又備後に参りますと外道が憑くと言ひます。其の外或は死霊が憑く、生霊が憑く、祖先の霊が憑く、魔が憑く、天狗が憑く、憑き物ばかりでも幾通りあるか分らない。之に依つて大抵御分りになりませうが、日本には妖怪の一種の迷信の種類が実に多い。それから心理的妖怪は何か苦痛の種がありまするとと魔が憑く、それに依つて此方らが迎へる。演題が心理的妖怪としてありますから、憑き物に就ては御話申しませぬが、心理と言つても普通の心理と招く心理とは少し趣が違つて居る。我々の精神状態を研究しまするのは常態心理と言ひ、吾々の精神作用の違つた場合に就て研究するのは変態心理と云ふ。変態心理に就て一々此処に述べる訳に参りませぬ。

それから幽霊、此幽霊と云ふものは、是れは大抵の国にある。殆んど世界各国にあると言つて宜しい。併し其の幽霊は矢張り国に依つて幾分の特色を帯びて、日本には日本特有の幽霊がある。支那には支那特有の幽霊、西洋には西洋特有の幽霊がある。我国の幽霊の一種特別な点は、幽霊は足が無いと云ふ一事です。外の国は幽霊を絵に書いても足がある。我国ののは足が無い。それから絵に書いた幽霊は男の幽霊が無い。芝居にしても絵に書いても男の幽霊は無い。是れは奇怪千万で日本の幽霊の特色である。是れは画工が工風してさう云ふものを書い

たに違ひない。普通応挙以來であると言はれて居る。応挙の幽霊は得意である。応挙の書いた幽霊が伝つて居る。それを本としてそれを真似て書いたものと見える。幽霊と云ふことは何処にもある話であるが、其の幽霊は何であるかと言ひまするとと、矢張り心理的妖怪である。霊魂不滅と云ふ点から言へば、吾々は死んでも其の魂は生き残る。生き残る以上は何か働きを現はさなければならぬ道理になりませうけれども、世間で云ふ幽霊其のものは必ずしも我々の死んだ魂と申す訳に行かない。然らば真実に幽霊に出遇つた、幽霊を見た云ふことはどういふ原因から起るかと云ふと、是れは別に道理がある。先づ極く手近く吾々が実験する所に依ると、吾々はどんなものでも夢を見て居る。事に依ると毎晩見る。其の夢はどんな夢かと云ふと、死んだ人を見る。是れはどんな人でも夢に死んだ人を見ない者はない。或は五年前の友達とか、或は十年前死んだ親類に面当り出遇つてあり〳〵話が出来る。是れは何であるか。果して死んだ人の幽霊が出るのであるか。誰も夕べ夢に死んだ人に出遇つたと云ふ。幽霊が出たと云ふ人は無い。夢は自分の心から産み出す。我心の中に記憶の宿つて居る其の感念が再現して姿形を現はして居る。それを知つて居るから夢に幽霊を見たと云ふて怪まない。吾吾は眼つて居つても幽霊を見るが、起きて居つても幽霊を見る。必ずしも眠つて居る時ばかりに限らぬ、併し起きて居つて幽霊を見ると云ふのは稀な話で、千人万人の中に本当の幽霊を見る者は一人有るかなしで、眠つて幽霊を見るのは誰も見て居る。何ぜ眠つて見る幽霊は沢山あるか、起きて見る幽霊は少ないか、斯う云ふと少し訳がある。例へば此室の中央にランプを点けて、戸をずつと開いて置くと、太陽の光線に支へられて、ランプを点けてもランプが光らぬ。併し日が暮れて夜分になると光線が這入らぬから暗室にするとランプが光つて来る。吾々眠る時は詰り目とか耳とか総べて五官の窓が鎖されて仕舞ふ。目も息めば耳も息む。総べての感覚が息む。詰り窓が閉ぢたと同じで、窓を閉ぢると心の一つになる見ることがアリ〳〵と現はれて来る。戸を閉ぢるとランプの光が現はれて来る、戸を開

くと太陽の光線に妨げられて見えぬ。目が働き耳が働き総べての感覚が働くと云ふと、外の強い刺戟が這入つて来る、外から光線或は音響、さういふ種々の刺戟が這入つて来る為に夢が打消されて仕舞ふ。太陽の光線でランプの光が見えなくなると同じだ。星が夜見えても昼見えない、と云ふて星が夜光り昼光らぬと云ふ訳ではない。同じ様に照して居るが、昼は太陽の強い光の為に星の光が打消される。外から強い刺戟が這入つて来ると打消される。そこで眼つて居る間に死んだ人の姿形を見ることがあるけれども、起きて居る間に滅多に見えるものでない。それは心の中で外の刺戟が比較上強いからで、若し外から受ける刺戟より中から受ける刺戟が強い時は起きて居つても夢を見る。其の一例は、臂へば熱病に冒される。冒されると云ふと、此熱に因つて心の内部を刺戟する。其の熱の刺戟に因つて夢が現はれる。腸窒扶斯と云ふやうな熱の高い病気に罹ると必らず何か物が見えて、色々の姿形、或は死んだ人の幽霊が見えて来る。詰り熱の刺戟に因つて、外から受ける刺戟より強い刺戟を心の中で受けるから出て来る。それから又精神が非常に疲れる。或は身体が非常に疲れた場合にさういふ夢を見る。甚どく疲れると身体の働きが不規律になる。其の不規律の結果、或る一部分が非常に強い刺戟を受ける場合が起る。さうすると夢に現はれる。健全の場合に於ては心全体が同様に刺戟を受け各部分一様に刺戟を受ける。所が疲れると或る部分に限つて非常に刺戟を受けると云ふ不規律な場合がある。さうすると強い刺戟を受けた時間に於て吾々夢を喚び起す。それから又我心に於て何か一つの事を一心に思ふて居ると、其の一点に精神が集注する。其の集注の結果是亦夢を見る。最も愛して居つた子供が死んだ、愁嘆の結果、一刻片時も忘れることが出来ない、と云ふ場合には、それが姿を現はすやうになる。是等は精神作用に因つて起る妖怪である。世間普通の妖怪はさう云ふ状態で起る。

併し妖怪にも随分奇怪な場合がある。或は夢にしても遠方のことを夢で見る、百里二百里先で、郵便電信で知

れない前にチヤンと夢で分つて居ると云ふ場合もある。而已ならず此頃は千里眼透視眼と言つて、目で見ることの出来ない物がアリ〳〵分つて来ると云ふやうな事件もある。是等は何であるかと言へば、それは如何にも不思議だ。不思議とすれば不思議であるけれども、之も強ち真の不思議とは言はれないと思ふ。それは精神作用の模様、それから御話しなければなりませぬが、唯透視眼千里眼の一の例丈けを以て吾々判断を下すことは出来ないと思ふ。近頃千里眼透視眼が学術上の一大問題になつたと云ふ処から、彼方らにも千里眼透視眼、此方らにも千里眼透視眼が出来ると云ふやうに、一の流行的状態を成して居る。是れは何も今日に始まつた訳ではない。ずつと昔から引続いて千里眼透視眼はある。日本では神代以来伝つて居る。印度の如き、神通と言つて六神通と言はるゝ伝記がある。其の神通が今日の所謂透視眼千里眼である。西洋でも此事は昔から伝へがある。今日始めてあつた訳ではない。私が先年妖怪を研究する時に出遇つた話であるが、例へば狐憑きで、どうしても感じ得られぬことを感ずる場合がある。或る狐憑の所に参りまして狐に出て行けと命令を致しました。所が今少し御待を願ひたい、門の外に犬が寝て居ります、犬が去つたら出て行きませうと言つた。それから門の外に出て行つて見ると果して犬が寝て居る。当人は奥に寝て居て犬が居ることを知つて居る筈はない。けれども当人にはチヤンと分つて居る、と云ふのは不思議のやうであるが不思議ではない。吾々普通状態に於ては犬が其の近辺に寝て居るか居らぬか分る筈はない。精神に異状を起すと、平素分らぬことが分つて来る。普通状態に於ては各方面が平均して居る。精神に異状を起すと、或る一点に集注して働きを起す。其の集注した点に於て平生どうしても感じ得られぬことを感ずる。さう云ふ場合が幾らもある。或る病人が耳を患ひまして、それから非常に耳の感覚が鋭敏になつた中に、畳の上に座はつて居りながら、椽の下を蟻が這つて居る音がする。其の蟻が何匹居ると云ふことがちやんと分る。是れは実際あつた話だが、是れは耳の或る点に精神が集注したと言つて宜い。普通状態ではどうし

ても感じ得られない。目でも其の通り、目と耳、吾々の触覚と云ふものは一種特別な働きを持つて居る。或は鼻の感覚、犬の如きは緻密な感覚を持つて居る。犬は人の足跡を嗅ぎ分けると云ふことは誰でも申しまするが、あれは足跡ばかりでない。動物学者が研究の結果、犬は人間一人々々の匂を嗅ぎ分けると云ふ。成程人間には一人々々の匂がある。日本人は日本人、朝鮮人は朝鮮人、支那人は支那人、西洋人は西洋人の匂がある。之を大体細別すると、銘々一人々々一種特別な匂を持つて居る。吾々はさう細かに匂は感じられぬ。吾々の鼻と雖も、もう少し感覚が発達して居たならば一人一人の匂を嗅ぎ分けることが出来るかも知れぬ。吾々は目で人を見分けるが、鼻では嗅ぎ分けることは出来ない。吾々鼻の感覚が目の感覚に及ばぬと云ふ丈けの話。之が発達すれば一一匂が嗅ぎ分けることが出来る。吾々は鼻の感覚が発達して居らぬ。所が犬は鼻で嗅ぎ分ける。犬は一人々々嗅ぎ分ける。其の実験の話もありますが、或る動物学者が、自分の平生愛して居る犬を止めて置いて、友達と一緒に道を歩るいて行つて、並んで歩るく、それから犬は足跡を嗅ぎ分けると云ふから、友達の穿いた靴と、自分の靴を穿き違へて、足を嗅ぎ分けると云ふならば、靴の匂を嗅ぎ分けるのであるか人の匂を嗅ぎ分けるのであるか、試験して見た事がある。友達に靴を穿き替させて犬を放して其の匂を嗅がした。さうすると自分の主人の穿いた靴の方を嗅ぎ、友達の穿き替へた靴を嗅ぎかけて一寸躊躇した。一寸分らぬものと見える。暫くすると友達の方に行くかと思つて居ると、矢張り主人の方に行く。其の点から考へて見ると、靴の匂を嗅ぎ分ける。靴の足跡ばかりを区別するのでない。其の人の匂を嗅ぎ分ける。吾々が歩るくと、自分の匂を其の歩るいた所の空気に残して行くものであらうと思ふ。犬は確かに其の匂を嗅ぎ分ける力がある。犬の鼻は神経が発達してさう云ふことが出来ませうけれども、吾々も目で物を見分ける如く、鼻にもう少し精神を集注したならば鼻で嗅ぎ分けることが出来るだらうと思ふ。でありますからして世間では普通状態を以て、総べての人が皆是丈けの感覚の力が無いと

断言しますけれどもさうでない。或る場合には機密の働きが出来るものがあるに違ひない。吾々手を太陽に晒しても手が焼けない。併し太陽の光線を或る機械を以て集めたならば焼ける。吾々普通状態に於ては、太陽が平均して照すやうに同じであるが、それが或る一点に集注して太陽の光線を集めて見ると、平生手を焼かないのが手を焼く丈けの力が起きて来ると云ふやうな道理で、精神を集注すると普通の状態の五倍以上或は十倍以上の働きを為す。此頃の千里眼透視眼も透視者が或る一点に精神を集注するからで、精神を四方に散乱して彼方らにも気を配り、此方らにも心を留めると云ふ場合には透視の働きは出来ない。或は二分三分五分、ずつと精神を集注するとチヤンと感ずる。筥の中に名刺を入れて、名刺の文字が分ると云ふのは目で分るか心で分るかと云ふのは一の疑問になつて居りますが、目を閉ぢて其の中の物が分る人もあり、目を開いて見える人もある。熊本の千鶴子と云ふのは目を閉ぢてやるさうで、丁度昨年実験のあつた時に地方の山の中に居りましたから実際見ませなんだが、千鶴子は目を閉ぢて当てるさうです。それから丸亀の長尾何とか言ひますが、あの婦人は目を開いて当てるさうです。目を開いて当てるのもあるです。さうすると精神の内部の力に違ひない。内部の力でどうして分るかと云ふと、詰り精神を或る一点に集注すると、普通状態でどうしても感ずることの出来ない一種の作用が起るに相違ない。丁度吾々の身体は目で見ることが出来ないのにX光線に掛けると透視される。精神を或る一点に集注すると心の中迄ずつと見るやうな力を起すに相違ない。是等を不思議とすれば不思議に違ひないが不思議でも何でもない。それから又遠方の事を知る、或は百里二百里先の事を知る。是れははつきり分らぬが、或は出来るかも知れぬ。出来るかも知れぬけれども、果してそれが出来ると云ふことは断言出来ない。私は先年各地方から報道を集めましたが、其の中に不思議なことから遠方の事が適中したと云ふこともあるけれども、それは極く稀な話で、稀にあると云ふことを以て何とも極められぬ。若し出来得るにした所が不思議ではない。幾らか今迄の心

理学の解釈を変へなければなりませぬけれども……既に此頃は無線電信とか申して、此方らに一の電流が起ると遠方に伝はつて、遠方に感する。斯うすると吾々の脳髄と云ふものが、詰り電信局で以て電信を受けて感ずる機械見たやうに、吾々の心の電信局で発電して、それが伝はつて先の外の心の電信局に感じて行くと云ふことが出来ない限りでない。併し無線電信と比較すると、無線電信は或る格段な所から来た電流丈けを感ずるものでない。多方面から来るのを総べて感ずる。若し吾々の心で遠方の精神を電流が感ずるやうなことが出来るならば、或る格段な人に限り感じて其の外の人に対して感じないと極める訳に行かないと思ふ。孰れにしても縦しさう云ふことが出来たと言つた所が必ずしも不思議ではないと思ふ。若し不思議とすれば人間の精神が不思議と云ふことになる。

然らば世の中に不思議は無いかと云ふ問題が起る。私が妖怪を研究した当初、世の中に本当の不思議があるか、本当の妖怪があるかどうか。私は固より世の中に不思議があると見る。抑妖怪を研究したのは、妖怪が無いと言つて研究したのでない。妖怪があるに違ひない、世間で云ふ真の妖怪、真の不思議、心理的妖怪が夫れ以外にあるであらうと段々取調べ、段段研究した結果、果して予想の如く世間で云ふ妖怪は、心理的妖怪、心理的不思議に違ひない。心理的不思議、心理的妖怪に過ぎぬと云ふことを信ずる。之を不思議として見なければ夫れ迄、不思議と思ふと斯うして眺めて見ると皆不思議である。私が四五年前、長崎県の島原半島に参りまして、丁度其の時に九州に昔筑紫湾の言ひ伝へで不知火の奇跡がある。島原の人が不知火は何であるか、どうか説明をして戴きたいと云ふ。其の時に申したことがある。長崎に行くと不知火は不思議であると云ふ、妖怪であると云ふが、不知火は妖怪でも不思議でも何でもない。何ぜかと云ふと、不知火は一年中の或る季節を限り、或る時間を限り広い海の一部分に火が見える。是れは妖怪とするに足りない。此島原の人は実際恐ろしい大きな光りのあることを

知らぬ。恐ろしい大きな火は何であるか。毎日東の方にボコリと恐ろしい大きな光が現れるのを忘れて居る。此太陽はどれ丈けの大きさとか云ふと、地球に比較して、天文学の報道する所に依ると、地球の百三十万倍の大きさを持つて居ると云ふ。其の火の塊りが毎日東にボコリと出る。天草灘に少しばかり出たものが幽霊でも何でもない。太陽の大を知らぬかと言つたことがある。太陽を毎日見て居るから不思議と思はぬ。能々考へて見れば太陽は不思議である。それから天にも無数の不思議がある。天の河がある。支那では天に磧があると云ふ。西洋の昔の説では、天は二つの半球から出来た、其の二つの半球を神様が其の間を縫つた。天の河は其の縫ひ目であると云ふ。昔はさう云ふ風に考へた。唯今では天に無数の星がある。或は其の数がどれ丈けあるか分らない。又其の光線の速力も早い。星の中には其の光線が地球に達するのになか〳〵百年千年経たぬと達することが出来ない星がある。之れはさうでせう。既に大虚空は無限だ。それにどれ丈けの世界があるか分らない。昔は人間と言へば地球に限る。地球の人間が、此天地間、宇宙間に於て人間以上の物は無いと言つて居る。所が此頃は言へなくなつた。火星に就て段々研究する所に依ると火星の中に確かに生き物が居る。或は人間以上の物が居る。火星の文明は地球の文明より進んで居る。火星の一部分に就てすらもそれ丈けの報告を得た、況んや大宇宙の中に無数のそれ以上の星がどれ丈けあるか分らない。天を眺めて見ると実に不思識、天体も不思議、星も不思議、月も不思議だ、此処に水がある、之を不思議と思ふ者はない。水は何で出来たか、不思議とも何とも思はぬ。昔は水は何であるかと言つても説明を得なかつた。水は何であるか、水は水だ。水は水と信ずる。今では水は斯々の分子から出来た。元素から出来た。水素と酸素が二と八の割分で結付いて水が出来る。昔は何であるか分らなかつた。今では水は酸素と水素で出来たと云ふ。それが不思議だ。何ぜかと云ふと、水は何から出来たか、水素酸素の二元素、此二素が結び付いて出来たと云ふのは、それを細かにしたと云ふ丈けで、其の水素酸素は何であるか、

元素と云ふものは何であるか、それから以上の説明は、唯化学の試験の反応に依つて、是れは水素、是れは酸素と仮りに名付けた、其の以上になると分らない。水素も分らない、酸素も分らない、元素其のものが不可思講だ。酸素も不可思議、水素も不可思議、不可思議同志で水が出来た。其の水は二とか八とかの割合で結付ひて水になる。何ぜ二と八が寄つて水になるか。二と三でなくて二と八と結ひ付くから水になる。水素酸素の二つから出来る。水は水だと云ふ。それで水も矢張り不可思議だ。之と同様、譬へば物が上から落るのは、昔は何で落ちるか知らなかつた。唯落ちるから落ちると云ふ。所が今日ではニュートン出て以来、地に引力がある、引力があるから落ちて来る。昔は何で落ちたのか分らなかつたのが、地に引力があるから落ちると云ふことが分つたが、是れも矢張り分らない。此地球の中心に物を引き付ける力を持つと云ふことは、どう云ふ訳であるか、何か分らない。それは詰り物と物と引付けるの力で小さい物が大きな物に引付けられる力を持つて居る。地球の大きな物が何ぜ小さい物を引付ける力があるかと云ふ問題になつて来ると分らない。夫れ以上の説明が無い。でありますからして物が落ちるのも水と同じで矢張り不思議だ。矢張り学問は進んでも不思議は不思議、それから更に溯ると吾々人間は何であるか、昔は吾々産れる時には、天から此精神を与へられたとか、神から此魂を授かつたと言つた。今日は誰も受付けぬ。結局吾々の精神と云ふものは親から伝はつたものである。親は更に親の親から伝はつたものである、さうして段々溯ると、一番大元の、独り人間のみならず、此地球上に始めて生き物が現はれた時代がある。其処に達する、夫れ以上に溯ると其の一番始めの、此地球の今迄何の精神作用の無かつた所に達する。此精神作用、或は人間の精神霊魂の如きものが何から現はれて来たか。斯う云ふ問題になると、今日迄解釈が付かぬ。それで唯今は地球活物論、或は宇宙活物論と云ふものが起つて、最近の哲学上の報告に依ると、昔は地球は死物であると言つて居つた。今日は此世界は活物である。此世界の内部に精神の作用を備へて居る。それがある

から外に発して来た。丁度梅の花が季節になると開くが如く、此世界の精神が内部に開く種がある。それが漸々に開発したと云ふと此世界は不思議な世界に違ひない。吾々人間の世界を研究し探つて見ると、天地の始めて起る前、吾々の精神が宿つて、段々順序階級を経て、今日人間となつて現れて来たので私は近頃哲学新案と云ふものを書いて、自分の意見を発表して置きましたが、世界はどうして出来たかと云ふ問題に就て、段々学術上の研究の結果、星雲説と云ふのがある。星雲説に依ると、宇宙の状態は渾沌たる雲の如く、非常に熱が高い、総べての物が火星状態であつた時代がある。それが一面に拡がつて居つた火星が、漸々に縮まるに従ひ熱を失ひ同時に収縮する。収縮すると同時に運動を起し、其の運動が回旋運動を起して、段々クルリ〳〵廻つて、円るい地球と天体が出来たのである。斯う云ふことになるので、夫れ以前は分らぬ。兎に角決して分らぬのではない。成程今日の実験では此以前に溯ることは出来ないけれども、茲に学術上に於て宇宙の原則として知られたものが三通りある。一は物質不滅、一切万物が不滅。も一つは勢力不滅、物質ばかりでない物質が持つて居る力も不滅である。それから因果、総べての物は因から果を生じ、因果無窮。茲に物質不滅、勢力不滅、因果不滅の三つの規則がある。三つの原則があると世界の物が、此宇宙間に渾沌たる星雲が靉靆いて居つて、其の以前に溯ることが出来る。世界を今照らす所の灯台と言つても宜い。其の三つの原則に照して見ると、どうしても茲に星雲の前に世界があると断定するより外ない。其の星雲が今日の世界、今日の事々物々を産み出して、此事々物々が復た星雲の状態に帰するに違ひないと云ふことを、今日の学術上証明して居る。例へば吾々が地球の上に生きて居るが、此地球が一遍壊はれて仕舞ふ。太陽と衝突して粉微塵に砕かるゝ、同時に太腸のある天体と云ふものも粉微塵に砕かるゝ。丁度大昔の星雲の状態に戻つて仕舞ふと云ふことを今日の学術界は吾々に報告して居る。此道理を以て更に世界の前に溯つて見ると、物質不滅、勢力不滅、因果不滅の原理に照して、どうしても星雲の前に世界がある。

世界があると云ふと、星雲の前に丁度吾々の見るやうな世界があつたと断定するより外ない。世界がある前に星雲の状態となり、其の星雲の状態が開発して今日の世界となり、今日の世界が星雲となり、其の星雲が再び世界の状態になる。何遍も何遍も解いては開き、一興一亡限りなく続くものである。斯うして見ると吾々の地球は今日始めてある地球ではない、其の地球の前の世界は斯う云ふ状態であつたに違ひない。丁度梅の花が今年散つて来年開き、来年散つて再来年開くと同じやうに、此世界に於て人間の花が昔度々開いたことがある。一の時代に於て人間の花が開き終つたのが復た次の時代に開き、之が限りなく続いて行くだらう。斯うすると吾々の精神と云ふものは今日始まつた精神じやない。産れた時に受けた精神は、地球の出始まり、今日の世界の前に吾々の精神がある。其の精神が変現説を出でぬと云ふことになる。出たり引つ込んだり、浮きつ沈みつして居る。今日吾々人間は是等の例に依つて、見る物不可思議でないものはない。妖怪でないものはない。天地万物悉く不可思議、悉く妖怪である。さう思ひ廻ぐらして見ると、茲に於て吾々不可思議の妙味を感ずることが出来る。仰いで天を眺めて見る、天体を見ても一の妖怪ならざるはなし、不可思議ならざるはなし。俯して地を眺めると、山川草木森羅万象悉く不可思議、一滴の水も不可思議であり妖怪である。其の中に立つて居る吾々にしても妖怪中の妖怪、不可思議中の不可思議。前を眺めて見ても不可思議、右を眺めて見ても不可思議、吾々は不可思議の海の中を泳ぎつゝある。今世界の不可思議の海に投じて見ると、吾々は此不可思議の妙妹を感じて、不可思議の妙味を味ふことが出来る。であるからして妖怪不可思議はもう宇宙に充ち満ちとして溢れて居る。清風明月是れ妖怪、狐憑や幽霊を世間では妖怪と云ふけれども、清風明月も是れ妖怪、此清らかなる誠の月も之が真の妖怪、之が私の妖怪研究の結果であります。

そこで世間の狐憑が妖怪、天狗が妖怪と云ふやうな御考を御持ちになるかも知れませぬが、縦し之を妖怪不可

議とした所で、此世界、此天地、此人間の奇々妙々、不可思議なる物に照して見ると、数へるに足りないものと言はなければならぬ。千里眼透視眼と雖も、此天地宇宙の大不可思議に比較して見ると、妖怪不思議とするに足りない。之が私の妖怪研究の結果で、之に就てもまだ〳〵今日も自分が妖怪研究に就て感じたことを御話申さうと思つたこともあり、宇宙の不可思議の夫々実験談もありますが、彼是時間が移りましたから、余り長い演説をしても御迷惑であらうと思ひまして、之で演説を結びますが、扨私のやうな不弁な演説で以て諸君の清聴を汚しましたのは、私から深く其の罪を謝して置きます。

4　「台北に於ける教育と宗教」（『台湾』四、明治四四年二月）

台北に於ける教育と宗教

東洋大学名誉顧問修身教会主唱者
井上円了師
修身教会拡張員
中野堅照師

（＊原典には井上円了と中野堅照の写真が掲載されている。本稿二、資料画像の〈画像1〉参照。）

井上円了博士曩に来台して勅語の趣旨を拡張せんが為に全島を巡講する事月余、北は基隆より南は蕃薯寮に至り帰途再び台北に至る。偶〃台湾雑誌社主幹岩崎北鳴氏、訪うて其文を求んとす。博士嘱せらるゝ処の揮毫積んで山の如く殆ど寸暇なし。即ち予を昼飯の間に招じ、其意を語て之を記さん事を以てす。予禿筆固より博士の意を伝ふるに充分なりとせず、然ども敢て其意に反する能はず、強て記して台湾雑誌に寄す。（江村

生）

欧山米水 欧の山、米の水、予は幾度か之に接触したり。東西両洋の間、亦幾度か之が風光を見たり。殊に内地の如きは山村水廓到る処に巡遊して其人情風俗を察せり。然れども未だ新領土の地に遊ぶ事少し。之を以て一たび此地を巡りて異りたる地域の異りたる風光を眺めんと欲し、曩に我国の北端たる樺太に至り、今又亜熱帯の地たる台湾に来る。台湾は実に沃野千里とも云ふべく、風光亦佳、真に南洋の富源たり。朝鮮の如きも地域の大なる其他の点よりせば富は相当に存すべきも比較的に云はゞ恐らくは本島に及ばざるべし。

宗教と教育 本島の開発、本島の発展に就きては、或は殖産興業に或は工商の業に之が発達を望むべき者勘しとせざるべし。然れども予は教育宗教の方面よりして之が発展を望まんとす。宗教若しくは教育の方面より之が発展を望む所以の者は、此両者が風俗習慣を改善し換風転俗の上に非常なる効果を有すればなり。

本島の教育 は今や大に其緒に就けり。下は小公の学校より中学に国語学校に、或は医学校に其他国語学校の附属女学校あり、高等女学校あり。校堂に宿舎に教室に何れも立派なる者にして其教授訓練の如きも大に完成しつゝある者の如し。而かして此等の学校より出でたる学生は其薫陶の結果、善良なる徳風を維持し励行しつゝあるは勿論の事にして、之が為に内地人及本島人の間に於ても善良なる美風を維持せるや必せり。殊に国語普及の如きは三百万の本島人を同化するに於て最も効力を有する者なりと信ず。然れども異りたる風俗習慣を有したる本島人を日本化せしむるに至りては単に学校教育のみを以て満足すべきにあらず、人生の生命の大部分を支配する偉大なる観念即ち宗教思想と云ふ方面よりしても之が改善に努めざるべからず。

本島の宗教 本島人の宗教なる者を見るに、儒にして儒にあらず、仏にして仏にあらず、道にして道にあらず、殆ど仏教道教の混血児たるが如きの観あり。而かして日本の仏教とは大に其趣を異にするが如し。然れども固とこれ系統に於て流を一にしたる者、色を異にし波を異にすと云ふと雖、水は即ち水たり、油の之と相容れざるが如き者にあらず。殊に本島人が観音仏を崇拝するが如きに至りては能く日本仏教と本島人の宗教との両岸を結びつくるの橋梁たり。両教の疎通融和は此橋梁によりて開かれ、改化遷善の道、亦之より起らざるべからず。而かして其之が趣旨を実行するの道如何。予は宜しく此点に向つて本島人方面に宗教制度を施行すべしと云ふ。

宗教制度 宗教制度なる者は何の国にも存す。よしたとへ宗教制度として八箇間敷者にあらずと云ふも、せめては一種の取締位は必要なる者なり。殊に本島人の寺院僧侶に向つては一層其必要なる者あり。而かも寺院は荒廃に任せ、僧侶は番僧にも足らざる者を以てす。其宗教に威厳なく随意渇仰の念を薄らぎ随て風教の維持に力なきや、勿論の事なりとす。故に予は少なくとも本島人側に宗教上の取締法を設けて僧侶の如きも相当に資格ある者を以て之を任ずると共に、之が生活其他に向かつても相当なる程度に運ばしめざるべからずと思惟す。

宗教上の保護 人或は保護せらるゝ者は却て発達せずと云ふ者あらん。これ又一面の事実たるに相違なきも、幼稚なる者をして充分なる発達を期せんと欲せば、終に助力即ち保護なる者を加へざるべからず。総督府に於ても勧業補助費等と称して殖産興業の上に助力を与へつゝあるは、斯業の充分なる発達を期せんが為なればなり。教育の如きも人の発達に向つての保護にして、之あるが為に人は能く蠢爾たる動物の域より進んで霊長たる人となる事を得。之を以て微弱にして幼稚なる本島の宗教を発展せしめ、改化遷善の美風を涵養し文明の民たるの資格を有せしめんとせば、宜しく之が宗教を取締ると共に、之を保護して其勢力を助長せしめざるべからず。

欧米の宗教 欧米の各国に在りても宗教に与ふる保護の程度は国により宗教によつて其性質を異にすと雖、海外殊

に殖民地の宗教に至ては多くは皆適当の保護を有す。保護其物は必ずしも金銭にあらず。法其寛厳宜しきを得、以て能く其宗教の発展を見るに至らば、即ちこれ一種の保護たり。仏蘭の如きは国内に於ては随分宗教に圧迫を加ふる者ありと雖、植民地に在りては非常に寛大にして、常に之が発達を助け、海外伝道の如きに至りては、領事保護の下に痛く優待せられつゝあり。亜米利加の如きは、経費若しくは政治上の意味に於て加護せらるゝことなしと雖、国民皆海外伝道の為に熱心なる賛助と費用とを擲ち、伝道団体なる者を設けて之が擁護を為しつゝあり。斯かる状態よりして之を観れば、内地の各宗が台湾に伝道を為すに就きても、国民若しくは其他の方面の適当なる援助の望ましき者なり。

蕃界の布教 本島には又本島人布教問題の外に生蕃布教なる者も必要なり。而かしてこは既に十有余人の布教使ありて深く蕃界に入り、或は言語に、或は風俗習慣に専心之が研鑽に従事せる者ありて、其効果は漸次に顕著なる者とならんが、生蕃布教の必要なるが如くに本島人布教も必要なり。本島の治政は重に三百万の本島人に向つて成されつゝあるを思ふ毎に、予は世人が本島人の宗教問題に対して余りに冷淡にあらざるかを疑はずんばあらず。殖民地の目的、台湾占領の意義よりして、日本人は今や三百万の本島人を同化すべき使命を有しつゝあり。而して内地本島人間の宗教上の橋梁は築かれたり。如何ぞ永く其間に溝渠を穿ちて之を対岸の火災視すべけんや

均しく皇化の民 台湾人をして永く台湾人たらしむるべからず、均しくこれ皇化の民なり。其長き豚尾の如き髪は断たざるべからず、其鳶口の如き纏足は解かざるべからず。髪を断ち足を解き衣を換へ靴を脱して日本帝国の臣民たると共に、其精神上の信念徳操に於ても均しく皇化の民として天地に恥づる事なからしむべし。同化の意義は多く此点に於て価値を有す。治政家の勤むる処、教家の将に営為すべき処、夫れ又茲に存するなき乎。

臺北に於ける

井上圓了博士曩に來臺して勅語の趣旨を擴張せんが爲に全島を巡講する事月餘北は基隆より南は蕃薯寮に至り歸途再び臺北に至る偶〻臺灣雜誌社主幹岩崎北鳴氏訪うて其文を求んとす博士辯ぜらるゝ處の揮毫積んで山の如く殆ど寸暇なし即ち予を書飯の間に招じ其意を語て之を記さん事を以てす予禿筆固より博士の意を傳ふるに充分なりとせず然ども敢て其意に反する能はず強て記して臺灣雜誌に寄す（江村生）

井上

中野

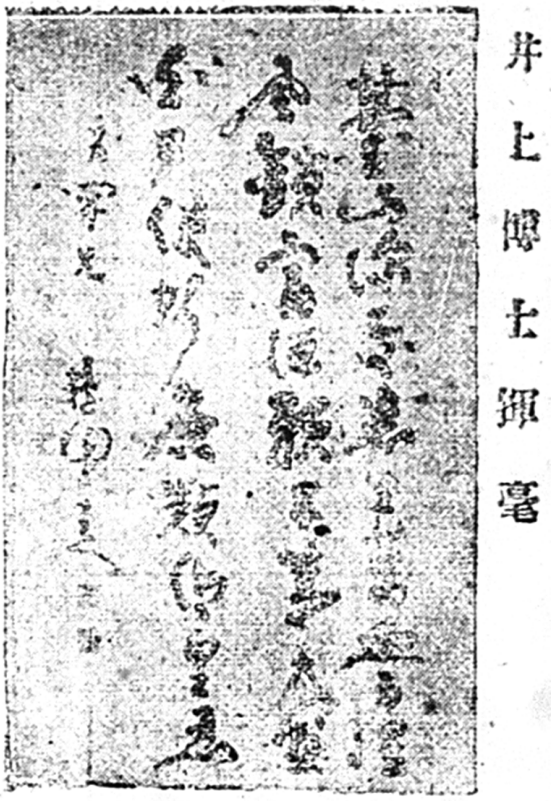
〈画像１〉「台北に於ける教育と宗教」に掲載された井上円了と随行員・中野堅照の写真

來ル十四日午後二時ヨリ東門外第二小學校屋内體操場ニ於テ講演會ヲ開キ左ノ講演有之候間會員諸君御參會相成度候也（會員外有志諸君御參會隨意）
明治四十四年一月
臺灣教育會
一 精神修養法
文學博士
井上圓了君

〈画像２〉台湾教育会主催の井上円了講演会の広告
『台湾日日新報』（明治 44 年 1 月 13 日付）

〈画像３〉台北の植物園での記念撮影。明治 44 年２月 10 日
出典：東洋大学創立 100 年史編纂委員会『図録東洋大学 100 年』（東洋大学、1987 年）41 頁

〈画像４〉『台湾日日新報』（１月 16 日付）に掲載された円了の顔写真。キャプションには「約一か月間に亘り全島を歴訪して各地に講演会を開き兼ねて揮毫の需に応じつゝある井上円了博士」とある。



〈画像５〉『台湾日日新報』（２月 15 日付）に掲載された井上円了の揮毫。内容は「台山深処悉生蕃、血雨腥雲鎖富源、願早青天懸白日、使斯庶類仰皇思」

〈画像６〉西郷孤月の画に井上円了が讃を書いたもの。右が幽霊の図、左が達磨。西郷は当時有名な画家であり、円了と同じ台北の旅館・日の丸館に滞在していた。日の丸館の主人が西郷に幽霊画を所望し、完成した幽霊画に円了が讃を書いたことが『台湾紀行』にある。この経緯については『台湾日日新報』（明治 44 年 1 月 18 日付）でも述べられる。